

## 村上春樹にみるポスト構造主義的消費者

池 田 信 寛\*

### 序 消費による自己同一性の獲得

1. マーケット・バロメーターが示す自己定義の方向性
2. 自己定義形成の過程と構造
  - 2-1. 空間軸における自己定義の形成
  - 2-2. 自己定義形成のための空間感覚の展開
  - 2-3. 時間軸における自己定義の形成
  - 2-4. 自己定義形成のための時間感覚の展開
3. 曖昧な自己定義の明確化
4. 消費による自己定義の多様性

### 結 ポスト構造主義的消費者

### 序 消費による自己同一性の獲得

自己同一性の問題は、ある社会に属する個人が、その社会の中での自己の位置を明らかにする、いわば、自己定義の問題である。この自己定義は、自分が何者であるかを日々具現化することにより獲得し直され続けるが、その獲得手段の主なものの1つが商品であり、また、我々の社会的行動を規定する大きな要因の一つである購買および消費行動である。自己同一性が的確に保たれている状態とは、自己とそれを取り巻く世界との間に齟齬がない状態であり、自己の欲求が完全に満たされている自己充足状態であると考えられる。その自己充足状態を導く手段の主なものは、現代の市場経済にあっては、そこで取引される商品である。マズローの欲求五段階説やヴェブレンの術示的消費に始まる様々な自己規定行動は、現代社会においては、無数の具体的な商品の購買と消費を通じて実現される。自己を規定ないし定義するためには様々な社会的行動が必要とされるが、その社会的行動の多くには市場を通

---

\* 広島経済大学経済学部助教授

じて入手する様々な手段、即ち、商品が伴うという意味で、自己定義の問題には、必然的に商品の購買と消費の在り方が絡んでくる。このような観点からすれば、商品と自己との関係は、商品の購買や消費の態様が自己を定義する一方で、自己定義の態様が商品選択の在り方を規定する関係にあると言えるため、両者の相関関係を読み解くことは、新しい市場調査の方向性を示唆するものとなる。

## 1. マーケット・バロメーターが示す自己定義の方向性

消費者が行っている自己定義の内容は、POSシステムや伝統的な市場調査から得られるデータを基に導き出すことができる。ただし、そこには、商品集合が自己定義を行うに十分な内容を包含しているという前提が存在している。しかしながら、自我が把握している自己は、自己全体の一部であることや自己が常に変化に対して開かれていることを考慮すれば、この前提は有効性を失う。商品によって自己定義がどのように行われているのか、あるいは、行われていないのか、更に、自己同一性を基にした自己定義に使用できる商品集合とその内容は十分に提供されているのか、あるいは、どのように提供すべきか、という問題に答えるためには、欲求の総体としての自己とそれを意識上で把握する自我との関係における自己定義の観点から接近する必要がある。

このような問題に答えるためには、「マーケット・バロメーター<sup>(1)</sup>」という概念が有効である。「マーケット・バロメーター」は、伝統的な市場調査から得られる定量的および定性的データでは提示できない中長期的な欲求の態様を指し示す手段、および、その概念である。その多くの一つは、自己の欲求に対して相対的に非言語的な、あるいは、感覚的な接近を試みる芸術分野での活動に存在している。

本稿では、その活動の代表者として、日本の代表的な若手世代の作家である村上春樹を取り上げ、彼の著作活動が提示する自己定義の態様を読み解く。特に、その著作『ねじまき鳥クロニクル』（新潮社、1994年4月～1995年8月）を心理学的に読み解いた河合隼雄との対談集『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』（岩波書店、1996年12月）で明らかにされている村上春樹の著作活動の内容に焦点を当て、「マーケット・バロメーター」としての村上春樹が、どのように自己定義を形成させているのかを検討し、そこから、現代社会における消費の方向性を探ることとする。

## 2. 自己定義形成の過程と構造

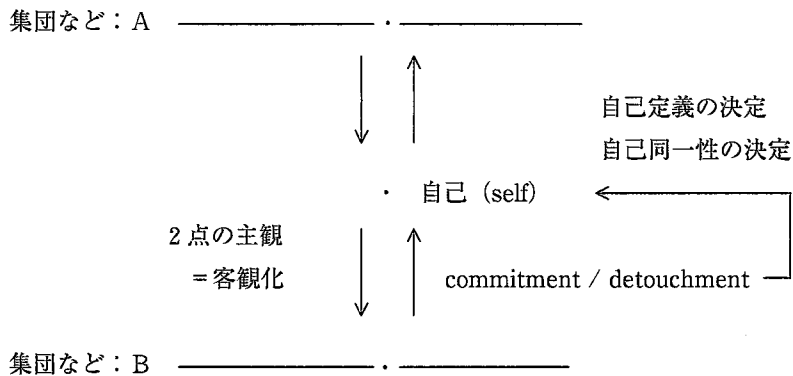
### 2-1. 空間軸における自己定義の形成

『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』で示された鍵概念の一つである

“commitment” および、その対概念である “detachment” は、それらの使用文脈から、特定の社会集団が持つ価値体系とその表出形態への「係わり合い」およびそこから「離脱」を意味している<sup>(2)</sup>。この2つの行為は、特定の社会集団に対しては全く反対の方向へ動くものではあるが、結果的に、自己とその集団との間にある様々な距離<sup>(3)</sup>を決定し、自己の相対的な社会的位置を割り出す行為である。厳密には、複数の座標軸によって構成される社会的価値体系の枠組みにおいて見出される自己の位置は、自己同一性 (self-identification) ないしは自己定義 (self-definition) の内容であるため、 “commitment” も “detachment” も、自己同一性の発見や自己定義を獲得するための自己客体化行為<sup>(5)</sup>である。

村上春樹は、日本社会 (特に文壇) からの “detachment” を行い、その後、同集団への “commitment” を試みているが、それが自己同一性の発見や自己定義形成の作業であることの正確な意味を理解するには、 “detachment” 後に彼が「係わり合い」を持ったのが米国であることを考慮しなければならない。彼は、日本社会からの “detachment” を行ったが<sup>(6)</sup>、それは同時に、米国への “commitment” 「係わり合い」を意味し、同様に、その後の日本社会への “commitment” は、米国社会からの “detachment” を伴っている<sup>(7)</sup>。

単なる「係わり合い」や「離脱」だけでは、自己同一性の発見や自己定義の形成は困難であり<sup>(8)</sup>、複数の異なる価値体系を持った社会の間を行き来することで、初めて、自己同一性の発見や自己定義を行う可能性が出てくる (図表1)。もちろん、「係わり合い」や「離脱」から、即座に自己同一性の発見や自己定義の形成が行われるのではなく<sup>(9)</sup>、そこに至るまでには、村上春樹が言う「井戸堀り」の作業が必要となる。その作業は、河合隼雄の言葉を借りれば、「全存在をコミットさせる」<sup>(10)</sup>「静かで深いコミットメント」<sup>(11)</sup>となり、その結果として、「自分の『作品』が生み出



図表 1

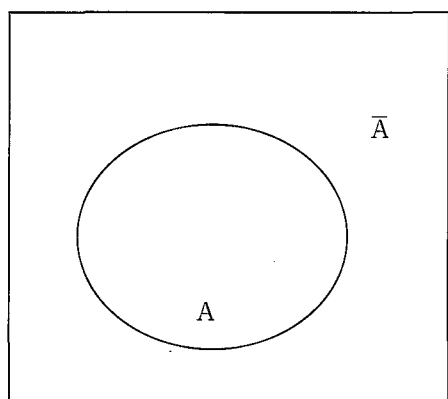
される<sup>(12)</sup>」。

## 2-2. 自己定義形成のための空間感覚の展開

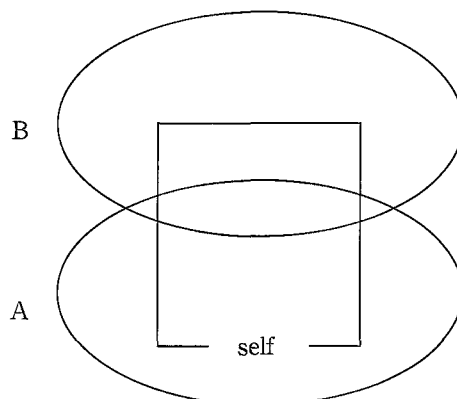
村上春樹のいう「井戸掘り」や河合隼雄のいう「自分全体をあげてのコミットメント<sup>(13)</sup>」の仕組みの一部は、両氏が挙げている例、即ち、村上春樹の「翻訳」と河合隼雄の「反抗<sup>(14)</sup>」によって説明を与えることができる。

体制に対する反体制という形での反抗は、それが体制の裏返しである限り、体制の動きに全面的に依存しているため、根本的な変革を促さないという意味において、その特徴も力も弱いものとなる<sup>(15)</sup>。これは、村上春樹の「係わり合い」と「離脱」の初期段階にも見られるように、ある社会集団Aからの離脱状況としての米国は、補集合 $\bar{A}$ として存在するが、この時点では、両集合もAを機軸として構成される集合に他ならない。すなわち、全体集合の枠組みは何も変わらず、その中での分類先ないし所属先が変更になるに過ぎない(図表2-1)。村上春樹は、離脱先の米国で翻訳を続けているが、これも、当初は、A対 $\bar{A}$ という図式同様の構造と機能を持っていたと考えられる<sup>(16)</sup>。

このような集合形式とは別に、全体集合の枠組みを外し、異なる2つ以上の集団を行き来することで、それらの集団の中にある自己独自の位置を再発見するに至る(図表2-2、なお、集合Bは、同じ社会集団であっても、Aの補集合ではない)。ここで、初めて、自己同一性の発見なり自己定義の形成が行われ、それらによって得られる社会的位置が、唯一無比の個性となる<sup>(17)</sup>。村上春樹が、自己の個性の一部として、「文化的な日本回帰<sup>(18)</sup>」を行えるようになった背景には、このような特定集団への全面的な「係わり合い」によって自己定義が不明瞭になる危険性がなくなり、



図表2-1



図表2-2

また反対に、全面的な「離脱」によって自己定義を補集合的に明確にする必要もなくなったことがある。<sup>(19)</sup> そのような個性は、村上春樹における翻訳の必要性を低下させ、<sup>(20)</sup> 日本語で小説を書くことへの「係わり合い」を高めている。<sup>(21)</sup>

### 2-3. 時間軸における自己定義の形成

以上の分析では、同時代における個人の自己定義の問題に焦点を当てているが、これについては、歴史の観点からも議論されている。<sup>(22)</sup> 特に議論されているのは、異なる歴史感覚が、個人ないし個性の在り方に影響を与えている点である。西欧的とされる認識では、個人は、個々の歴史的事実との「係わり合い」の中で位置づけられるの<sup>(23)</sup> に対し、日本的な認識では、「すべてがいま起こっている」中に位置づけられる。<sup>(24)</sup> 自己同一性や自己定義が、「複数の座標軸によって構成される社会的価値体系の枠組みの中で見出される自己の位置である」との観点に立てば、両者の認識から生じる違いは、前者が、個人と個々の歴史的事実との時空間的および心理的社会的関係の総体の中に位置づけられる一点として形成されるの<sup>(25)</sup> に対し、後者は、そのような位置関係を曖昧にしたまま形成される点にある。あるいは、前者を因果関係的な、少なくとも、相関関係的な理解とし、後者を、運命論的な理解とすることも可能である。また、エーリッヒ・フロムが『生きるということ』<sup>(25)</sup> で述べているように、両者の関係を、“to have” と “to be” の観点から吟味できる可能性も指摘できる。

客観性に関する先の定義、「ある客体に関して2つ以上の主観により獲得される共通認識」に立てば、前者が、歴史に対する客観的な認識を前提として成立する一方で、後者は、非客観的概念という文脈での主観的な認識を前提として成立すると理解することも可能ではあるが、しかしながら、河合隼雄の言うように日本的な個による歴史認識が「ものすごく深いところに通じていく」<sup>(26)</sup> のであれば、単に、歴史における日本的な個の在り方が、非西欧的ないし非客観的認識ではなく、ユング心理学における「文化的無意識」「普遍的無意識」<sup>(27)</sup> のような認識を前提として成立している可能性は無視できない。

村上春樹は、このような同時代の日本における個人の曖昧な定義を明確にするために、「歴史という縦糸」<sup>(28)</sup> を持ち込むことの可能性を指摘している。しかし、日本における歴史は、河合隼雄が言うように「すべてがいま起こって」「漠然としたかたまりのようにして受け止められて」<sup>(30)</sup> おり、そのため日本人が歴史を認識するためには、村上春樹のいう「井戸」<sup>(31)</sup> に入らなければならない。「歴史という縦糸」を持ち込むことは、例えば、日本と米国のような同時代における異なる複数の社会集団

の中で自己の位置を見出すことを、現代と過去という複数の時間軸の中で行おうとするものである。空間と時間という差はあるものの、両者に流れる論理は同じであることを考えると、「井戸」に入ることと「歴史という縦糸」を持ち込むこととは、両立させがたい論理であると指摘せざるを得ない。むしろ、先に指摘したように、ユング的な「文化的無意識」「普遍的無意識」の存在を前提とした論理展開を採用すべきである。

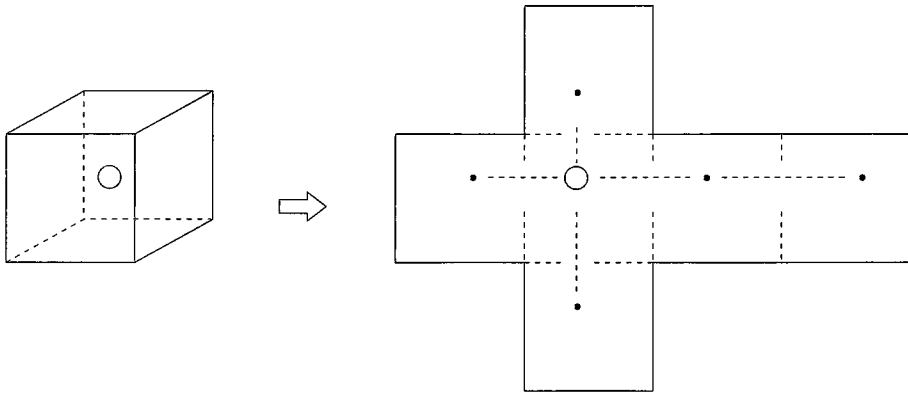
#### 2-4. 自己定義形成のための時間感覚の展開

個人を歴史という時間の流れと社会という空間の広がりの中で捉えようとする際に生じる、以上のような2つの立場の違いは、絵画的および数理的な手法によって説明が可能である。

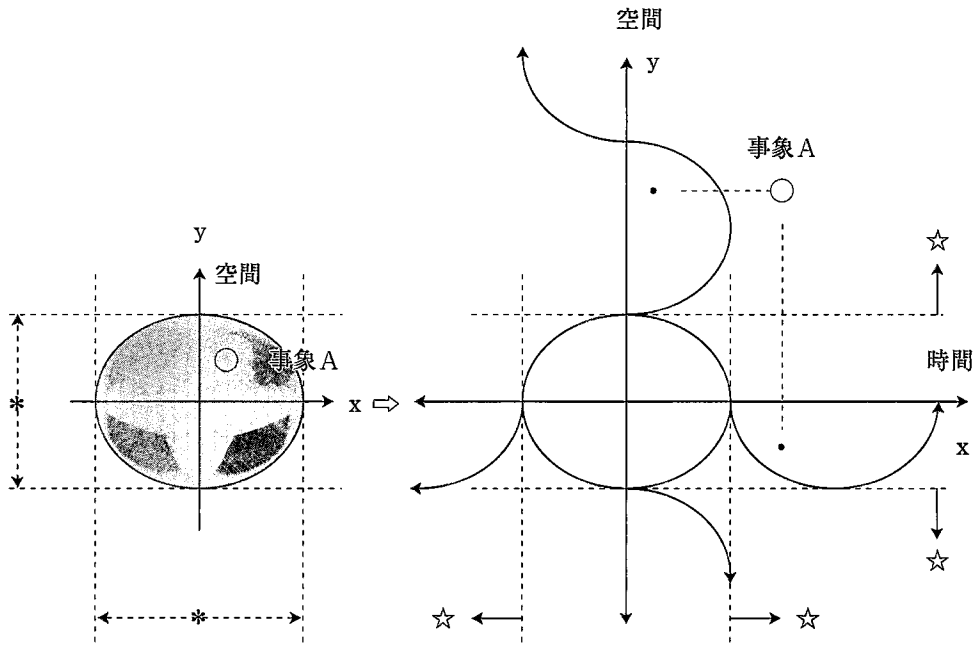
例えば、ある物体を個人とそれを取り囲む世界の象徴とし、これを認識しようする場合、絵画手法としてのキュービズム（立体派“Cubism”）を例にとれば、3次元に存在する対象の総体をそのまま2次元平面に移しかえるために、その物体の認識は、平面認識においては一見して混沌とした内容となる。数理的には、ある物体を認識する場合、その物体の展開図を作成するなり、任意の座標軸に、3次元体の質量を計測するための方程式を形成する。展開図であれ方程式であれ、幾通りの設定が可能ではあるが、物体のどの部分が他の部分とどのような位置関係にあるかは算出できる（図表3および4）。

個人の直接的な体験による現実認識の範囲は、一定の時空間内に存在するため、その体験や経験は、時空間という座標軸上の一定範囲に限定される（図表4-1の\*の部分）。学習を通じて得られた知識も、その存在を確認できない内は、その知識を学んだという事実のみが個人の体験内に留まるという意味で、この範囲を出るものではない。知識という間接的な形でしか得られない社会的および歴史的経験（あるいは事実）を、それらの然るべき位置にて認識するためには、三角関数におけるような「展開」という発想が有効である（図表4-2<sup>(32)</sup>）。

「展開」という発想の具体的内容は、例えば、村上春樹が、彼の誕生以前に起こった真珠湾攻撃について考えるとき、「第二次世界大戦というものを洗い直さなくてはならない<sup>(33)</sup>」と述べていることから理解できるように、歴史的事象の因果関係の連鎖を明らかにすることである。個人の体験や経験の範囲を越えた事象は、その体験と経験の範囲内では、すべて一括して、他の世界と過去の出来事ではありえないのであるが、それらの事象をできるかぎりその正確な社会的歴史的的位置と因果関係において捉えるためには、個人の体験と経験が、それを越える範囲の事象の中で



図表 3



\* 個人の直接的な経験の範囲 / ☆ 個人の間接的な経験の範囲

図表 4-1

図表 4-2

生じていることを認識し、その範囲の正確な時空間的広がりをつまえた上で、知識として認識している様々な事象の因果関係を明確に確認していかなければならない。その作業を、「展開」と呼ぶ。哲学的認識から見れば、自己同一性や自己定義が、個人の体験と経験を社会的歴史的広がりの中に位置づけることで初めて得られるという考えは、構造の認識なしに実存の発見はありえないとする姿勢の現れであ

る。

このような接近法は、未だ発想法の域を出ていないが、この手法を採用すれば、村上春樹と河合隼雄が論じている文学的および心理学的な「個」という認識およびその認識における2つの形態の差に、数理的な説明を行う可能性が生じ、そこで論じられている内容の実証性が高まれば、文学や文学者（広義には芸術と芸術家）の動向から、社会や市場の動向を把握できる可能性が出てくる。

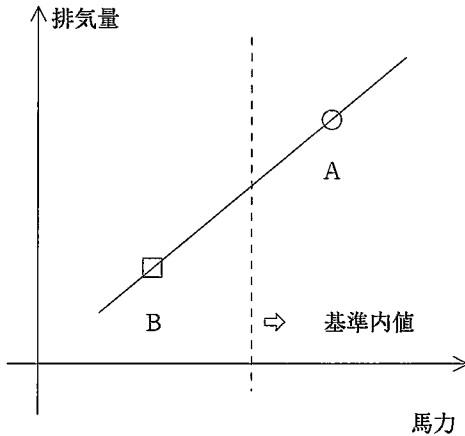
村上春樹が行う翻訳作業においても、この歴史認識と同様な差異が現れている。村上春樹は、英語から日本語への翻訳は代名詞の処理に尽きるとしているが<sup>(34)</sup>、「代名詞が何かといたら、個のディフィニション（定義・定置）ですよ。ね。（中略）それと同時に、そういうディフィニションというのは、ほくの中でこっちと向こうというのではなくて、一種のあいまいな、アンビギュアスなものになってくる<sup>(35)</sup>」という言葉に明らかなように、文脈における個々の単語の位置を明確にする英語（とそれに代表される認識類型）と、その位置を曖昧にする日本語（とそれに代表される認識類型）の関係は、先述した個人の自己同一性や自己定義の在り方の差異そのものである。

### 3. 曖昧な自己定義の明確化

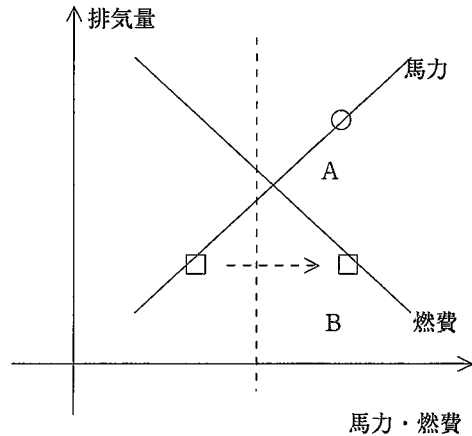
異なる秩序を持った複数の社会集団と自己との係わり合いの程度（心理的距離）を明確にした後に得られる自己同一性や自己定義は、「個人」あるいは「個性」という形で捉えられる。そのため、たとえ様々な社会集団の秩序が、社会の中で固定的な位置を占めていたとしても、その位置と自己の位置との関係は個人によって異なり、それが個人による“commitment”の違いとして現れる<sup>(36)</sup>。反対に、異なる秩序を持った複数の社会集団と自己との係わり合いの程度を比較する機会が少ない場合には、自己同一性や自己定義は、集団の秩序が持つ特性と同化し、結果的に、特定の社会集団への個人の全面的な“commitment”<sup>(37)</sup>となって現れる。これが、同時に、その集団の構成員の固体差<sup>(38)</sup>を見えにくくする理由となる。

この2つの違いは、異質性を前提とした“commitment”と同質性を前提とした“commitment”の違いから生じていると考えることも可能であるが、より正確には、自己同一性や自己定義を得るための異なる2つの視点を得られるかどうか、つまり、客観性の有無（およびその程度）による差異（とその程度）から生じている。その意味で、「個性がある」あるいは「個性がない」とする表現は、実際に個性の有無を記述しているのではなく、正確には「個性が明確になっている」あるいは「個性が明確になっていない」である。





図表 5-1



図表 5-2

個性を明確にするための2つ以上の視点を獲得するには、基本的には2つの接近方法がある。一つは、特定の基準による位置測定の幅を拡大するとともに、測定単位を細分化すること、もう一つは、基準の数を増やすことである。

例えば、個性を色に例えるならば、「緑」という色の特定は、他の色の存在を前提にしている。もし、この世に「緑」しか存在しないのであれば、「緑」自体は存在しているものの、「緑」という色の特定はできない。そこに「赤」という色が存在すれば、「緑」とは、その色とは異なる色であると特定できるが、より客観性の高い色の特定は、光の全波長の中において初めて成立する。もちろん、「緑」自体にも様々な幅が存在するため、それらの区別は可能であるが、光の全波長の中での位置の特定に比べると、その区別は相対的に小さい。

同じように、全ての自動車は、その馬力の大小によって序列を付けることが可能である。全ての自動車は、馬力という基準の中に、その位置を見出すことができる。色と同様に、馬力の測定幅を拡大し、測定単位を細分化する程、馬力という基準内に、自己の位置を綿密に特定できる自動車の数は多くなる（図表5-1）。しかしながら、馬力という基準は、自動車の特徴、換言すれば、その同一性や定義を特定するには十分ではない。例えば、燃費という基準によって、自動車は、馬力とは異なる序列を発見する。このような複数の基準の中において、自動車は、その厳密な特徴を特定できる（図表5-2）。

#### 4. 消費による自己定義の多様性

消費活動が社会生活の大きな部分を占める状況においては、購買行動および消費

行動は自己定義の形成に多大な貢献を行う。集団の構成員は、集団における自分の位置を特定するために、自分を他の構成員から区別する一方で、集団への帰属意識を得るために、自分を他の構成員に同調させようと試みる。購買され消費される商品は、個性の発揮を通じた他人との差別化の手段に使用される一方で、他人と同じ社会集団に属しているという安心感を得るための手段としても使用される。

このような消費者像を前提とすると、これまでの分析から、ある集団の構成員である消費者は、まず、与えられた商品選択肢の中から自分の位置を割り出そうとするが、前節で例示したように、商品集合が内包する多様性の大小が、自己定義の正確さを規定することを考慮すると、そこには、幾つかの異なった自己定義の状態が存在すると考えられる。

A. 相対的に細分の多様性が小さい市場の中で提示される商品の選択肢の中に自分の位置を見出す者は、より微細な商品の差異により他人との差別化を図ると同時に、似たような範疇に属する商品の購買と消費により社会への帰属感を得る。これは、日常の行動範囲の中で提示された商品差異の中に自己定義を形成できる例である。

B. 相対的に細分の多様性が小さい市場の中で提示される商品の選択肢の中に自分の位置を見出せない者は、幾つかの解決法によって自己定義を形成する。

- 1) 擬似：提示された何れかの商品範疇から商品を選択し、その商品に満足するか、あるいは、満足しなくとも購買し消費する。このような選択は、自己定義に商品を当てはめる（あるいは、自己定義に適合する商品を購入・消費する）場合とは反対に、商品が持つ特徴に自己定義を当てはめるものである。
- 2) 離脱：既存の市場細分のどれにも当てはまらないという理由で、既存市場とは別途に存在する市場から異なる奇抜な意匠や機能を持った商品を選択する。そのような商品を選択すること自体が、購買者ないし消費者の自己定義に貢献している。あるいは、どの商品も購買・消費しないという行為自体に、自己定義を見出す。いずれの場合も、商品が自己定義にあてはまるかどうかは問題ではなく、他人とは相対的に大きく異なった商品購買の意思決定をする点に特徴がある。
- 3) 保留：既存の市場の外に存在する市場も含めた相対的に細分の程度が大き

い市場の中で、自己定義に当てはまる商品を選択する。あるいは、自己定義に当てはまらない商品は選択しないという選択をする。これは、選択しない行為自体にも自己定義を見出す上記のような反動的ないし補集合的な態度とは異なり、商品選択において自己定義を最優先させる態度である。

Aのような細かく差別化された商品集合の中から、自己の欲求に見合う商品を選択するという購買および消費行動は、一見すると多様性に富んでいるように見受けられる。しかしながら、商品による的確な自己定義という観点からは、Bに属する商品選択の存在が指摘される。そのため、消費者全体で見た場合、むしろ、自己定義の機会を阻まれ、自己同一性の獲得に困難を強いられている消費者像が浮かび上がって来る。消費が多様化していると言われるが、それは飽くまでも特定の商品集合内での現象であり、その商品集合から逸脱する商品は、その多様性を逸脱するものとして扱われるか、あるいは、既存の商品集合の中に商品選択を迫られるため、既存の商品集合の外に広がる商品の多様性は認識されない。

## 結 ポスト構造主義的消費者

現在の多くの消費者は、与えられた商品集合の中で、日々の購買と消費を行う一方で、多くの商品の購買と消費を控えている。これを、単に、デフレ経済下における買い控えと理解したのでは、特定の高額商品の売り上げが伸びている現象を説明できない。

このような現象を理解するためには、「井戸堀り」<sup>(39)</sup>における「保留」<sup>(40)</sup>の概念が有効である。現在の消費者が採っている態度は、商品の購買と消費という「答」、即ち、自己同一性を具体的に獲得するための手段としての商品が出現し、その手段として妥当だと判断できるまで、商品の購買と消費を「保留」という態度である。「保留」期間に、自己の欲求の態様を時間を掛けて探り、自己が何を欲しているのか、および、提示されている商品は自己が欲している内容に合致しているのか、その正確な状態を探り当てようとする。そのような姿勢は、昨今のスローフードに始まるスローライフの隆盛や、「こだわり」を売り文句にした高額商品の購買と消費に顕著に現れている。前者は、自己の欲求の在り方を歴史という時間軸の中で時間を掛けて確認しようとする消費行動の現れであり、後者は、自己の欲求の発現を既存の商品の中に即座に求めようとせず、自己同一性の発現に寄与する商品の出現まで、商品の購買と消費を「保留」したものである。

もちろん、自己定義に見合う商品の出現まで日々の生活を待つことは、現実的に

は不可能であり、消費者は多くの購買と消費を既存の商品集合の中から選択せざるを得ないが、同時に、それらの購買と消費は「仮のもの」としつつ、自己定義に見合う商品の出現を時間を掛けて「待つ」状態を受け入れている。これが、現代の消費者をポスト構造主義的消費者と呼ぶ所以であり、この状況から次の消費段階に進むには、「井戸堀り」と「保留」という態度が、消費者も含めて経済活動に従事する者に求められることになる。

### 注

- (1) 池田信寛「マーケット・バロメーターとしての村上春樹 一反小説経済の限界を越えて」, 広島経済大学経済研究論集, 第26巻第2号, 2003年9月, pp. 25-42.
- (2) “commitment”の対象は、社会の中で個人が達成や服従などの形で向かうべき、目標や目的、規範や規則、手本や模範など、秩序形成と維持のための様々な手段である。
- (3) ここでは主に心理的距離であるが、それを得るために、結果的に、物理的距離も生じている。従って、「空間」という言葉には、物理的な広がりに加えて、社会的心理的な広がりなども含まれる。
- (4) この定義に関して、位置には数量的な性質しか表示できず、位置が持つ意味、即ち、質量に関しては表示がなされていないという反論があるだろう。しかしながら、社会的価値体系の枠組みを構成する複数の座標軸自体には予め意味が付与されている事を想起すれば、位置の算出自体が位置の持つ意味の決定と同義であり、位置の算出により位置の意味が決定されると言えよう。
- (5) 客観とは、ここでは「ある客体に関して2つ以上の主観により獲得される共通認識」と定義しておく。「客体化」とは、この客観性を得るための作業である。
- (6) 河合隼雄・村上春樹、『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』, 岩波書店, 1996年12月, pp. 09-10, および pp. 36-37.
- (7) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 37-38.
- (8) pp. 35-36. なお、このことは「アメリカにいるあいだ、何にコミットすればいいのか、これからどうすればいいのかだろうってぼくはずいぶん考えてきたつもりなのです。ところが、日本に帰ってくると、やっぱり何にコミットしていいか分からないんです」(pp. 13-14) という発言に明らかである。
- (9) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 13-14.
- (10) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 15 脚注.
- (11) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 15 脚注.
- (12) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 41 脚注.
- (13) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 41 脚注.
- (14) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 37-42 脚注.
- (15) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 39 脚注.
- (16) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 41.
- (17) 様々な分野で数多く見られるこのような現象は、一例を挙げるならば、ドイツの音楽集団 Tangerine Dream に見られる音の変遷にも顕著である。初期の作品では、伝統的な音楽様式への反動を顕著に体現しており、特に1972年の“ZEIT” (Ohr OMM 2/56 021, 下

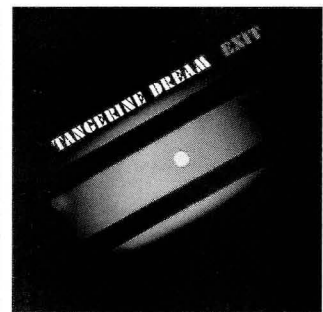
図左)や1974年の“PHAEDRA”(Virgin V2010, 下図中央)では、伝統的な演奏形態から離れるだけではなく、三人の電子楽器演奏者が生み出す音の「うねり(不明瞭な旋律, 不安定な和声, 不定型な律動)」のみが構成要素となり、それにより、音楽の古典的な三大構成要素である旋律・和声・律動の区別までが消滅している(あるいは、旋律・和声・律動が未分化のまま提示されている)。その後、旋律を主軸とした曲構成から律動を主軸とした曲構成まで、様々な音楽形態の試行錯誤を経るが、1981年の“EXIT”(Ariola 203 998-320, 下図右)では、伝統的な音楽様式への再接近が図られ、その結果、電子音による分散和音が律動を担当し、この律動と複数の断片的な旋律の積み重ねが同時に和声を形成するようになった。これにより、Tangerine Dreamの音楽形式は、伝統的な音楽の単なる補集合あるいは反体制として存在するのではなく、従来の古典音楽分野における旋律を主体とする曲構成から、軽音楽分野において後に大きく展開を見せる律動を主体とした曲構成(通常テクノと呼ばれる)まで広がる音楽領域の中で、その独自性が評価されるようになる。この時点で、全く性格を別にすると思われていた旋律的な分散和音と律動とが一つに統合され、村上春樹が言う「そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる(河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 70-71)」現象が生まれている。このような音楽内容の変化は、これらの作品の収納意匠にも現れており、3者とも抽象性の高い意匠ながらも、前2者のそれは、聴き手が心象を形成する以前の原初的狀態を表出するような曖昧模糊としたものであるのに対し、後者のそれは直線と曲線, 明暗, 遠近を明瞭にしており、冷たい機械や都会などの明確な印象を与えるものになっている。



“ZEIT” (1972)



“PHAEDRA” (1974)



“EXIT” (1981)

- (18) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 38 脚注。  
 (19) 河合隼雄は、このような態度が内包する「暴力性」を指摘しているが、それは、図表 2-1 および図表 2-2 で言えば、このような態度によって、集合 A とその補集合という閉じた集合が開かれたものへと壊れる危険性を持っているからである。  
 (20) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 42 脚注。  
 (21) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 38 脚注。  
 (22) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 42-47。  
 (23) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 45。  
 (24) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 45。  
 (25) Erich Fromm, *TO HAVE OR TO BE?*, 1976 (佐野哲郎訳『生きるということ』, 紀伊国屋書店, 1977年)。  
 (26) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 45。  
 (27) 河合隼雄『コンプレックス』, 岩波書店, 1971年, pp. 194-202。

- (28) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 46。
- (29) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 45。
- (30) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 46。
- (31) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 44。
- (32) 村上春樹が「自分とは何かということはずっとさかのぼっていくと, 社会と歴史ということ全体の洗い直しに行き着かざるをえない (河合隼雄・村上春樹, 前掲書, pp. 59-60)」という発言は, 自分という個の存在の位置を確定するためには, 個の体験や経験の場を越える時空間の広がりという認識の座標軸を必要とすることを意味している。
- (33) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 58。
- (34) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 47。
- (35) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 48。
- (36) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 18。
- (37) 河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 18。
- (38) 一例として, 村上春樹が指摘しているように, 日本語には, 「我 (エゴ) というものが相対化されないままに, ベタッと迫ってくる部分があって, とくにいわゆる純文学・私小説の世界というのは, ほんとうにまとわりついてくるような感じ (河合隼雄・村上春樹, 前掲書, p. 40)」になる点を挙げられる。これは, 日本語が個人の固体差を前提として使用されないために生じる。換言すれば, 日本語が相対化されないということは, 言葉の定義が不明瞭なまま使用される事であり, その結果, ある使用者における日本語の特定の使用法が, 他の使用者にも暗黙的に強要され, 同時に, 他の使用者もその使用法を暗黙的に容認することになる。
- (39) 池田信寛, 前掲書, pp. 32-35。
- (40) 池田信寛, 前掲書, pp. 37-38。